

世界旅打ち気分

●第31回・イスタンブールとイズミル

須田鷹雄

写真のカラー版は
<https://www.instagram.com/sudatakaoshoten/>
の#グリーンファーム会報#2021年1月号
でご覧いただけます



イスタンブールのレース風景



パドックで出走馬を吟味する観客たち



イズミル競馬場のスタンドもなかなか立派

<https://www.instagram.com/sudatakaoshoten/>

日本で話題に上がることはあまりないが、トルコは隠れた競馬大国である。トルコ国内には9つの競馬場があり、場外馬券売り場の数は100単位どころか4ケタとも言われている。トルコジョッキークラブ直営の場外馬券売り場もあるが、個人オーナーの運営する小規模場外が多く、小さなリテイリングショップと同じくらいのサイズのものでそこらじゅうにある。

トルコはイスラム国だが飲酒もギャンブルも許容されている。とはいえさすがにカジノはないので、賭けの需要は競馬へ向かう。馬券は自国のレースに賭けるものももちろん、海外のレースに対するサイマル発売も早くから行われており、日本の「海外馬券」よりも先輩だ。

トルコの競馬場のうち、筆者が行ったことのあるものは2つ。まずはイスタンブール・ヴェリエフェンデイ競馬場だ。1周2020メートルの芝コースと、1870mのポリトラックコースを備える、かなり立派な競馬場である。トルコ自体はパート2国だが、この競馬場で行われるトプカプトロフィーとボスポラスカップは国際G2であり、賞金が

高いためヨーロッパからの遠征馬もいる。そのため検疫のための国際厩舎もある。

競馬場までは電車で行ける。ヨーロッパサイド・ガラタ橋の南側に観光客もよく行くエジプシャンバザールという市場があるが、そのすぐ近くに始発駅のシルケジ駅がある。そこから列車に乗っていったエマハールという駅で降りる。下りる前に北側に競馬場が見えるので、道に迷うことはないだろう。

駅から競馬場入り口まではやや遠く、先述した国際厩舎の前などをずーっと歩いていて12〜15分ほどかかる。

帰りは逆ルートでもいいが、競馬場の前にミニバスが来たら飛び乗ってもいい。どこ行きかは分からなくても、どこかで地下鉄駅か、主要バス行ききの大型バスが通る幹線道路に出る。いまはムホとGPSで自分の位置が分かるため、迷うことはないはずだ。ちなみに外国人には席を譲ってくれたりするが、現地女性が乗ってきたら席を譲るとよい。向こうのマナーが分かっている観光客ということで車内が歓迎ムードになる。

中に入ると、施設も立派であることに気づくだろう。ギフトショップもあるし、パドックのサイズも大きいし、馬とレースを見やすい競馬場だ。指定席などに入る必要もなく、一般席で十分に楽しめる。

競馬新聞は中で売っているが、自場のもっと場外発売用のものがあるのに注意したい。馬券は、7〜8年前の時点ではアメリカと同じタイプのタッチパネル式券機が入っていた。最初に窓口で現金をキャッシュアウトに変えなければならぬのでそこだけ手間取るかもしれないが、そこをクリアすればマークカードを塗る必要がないタッチパネルなので、一気に楽になる。もちろんマークカード+窓口でも購入可能だが、いずれにしても単勝が「G」（ガニャン）、馬連が「I」（イキリ）、馬単が「S」（シラリ）といった賭式の種類とその呼称はネットで予習していったほうがいい。

ただ、基本的にトルコで馬券を本格的に買うことはおすすめしない。その理由は、オッズ板を見れば分かる。単勝オッズをみただけで、どの馬もいまひとつ配当がつかない。

いと感じるであろう。それもそのはず、トルコは馬券の控除率が50%なのだ。払い戻される割合で考えると日本の70〜80%→トルコ50%なのだから、買えば買うほど深みにはまる。

馬券は最低限にして、競馬と競馬場そのものを楽しんでいただくのがいいだろう。控除率50%でも馬券おやじ達は盛り上がりしているのだ、その雰囲気身を委ねればよい。場内の食べ物は何れもおいしいし、イスラム国でありながらビールも売っている。

できればポリトラック開催の日よりは芝開催の日のほうがレースを近い距離で見ることができるのでおすすめだが、こればかりは巡り合わせだから仕方ない。開催日程はトルコジョッキークラブのホームページで確認できるので、観光でイスタンブールに行く際はぜひ競馬場にも行っていただきたい。

筆者が行ったことのあるトルコの競馬場、もうひとつはイズミル競馬場である。イズミルはトルコから見ると南南西600キロほどのところにある都市。行く場合は飛行機で行くことになる。

トルコの地方都市の競馬場なんて小さいのだろうと思われるかもしれないが、これがまたしっかりした施設。他に娯楽が少ないので入場人員も多い。競馬場の前には食べ物や飲み物の屋台なども出ている。私は口で食べたのでそういう食べ物を食べるシーンも欲しいということ、ムール貝の貝殻にシーフードピリフを冷やしたようなご飯を詰めたものをいくつかつまんだ。名前が分からないが、この食べ物自体はイスタンブールでもよく見る。モノがモノなので食中毒覚悟でもあったが、幸い当たることはなかった。

我々は場長室に通され、競馬場幹部と食事をして、業務エリアを撮影して、続いては一般ファンが馬券を買っているようなエリアを撮影……ということになったのだが、競馬場広報の女性が「私は何年も務めているが、あの部屋には入ったことがない」「正直、客層として怖い」と言いました。

そんなこと言っても競馬場の中だから危険ということはないだろう……と思っていたのだが入ってみるとあまりウェルカムではない雰囲気

気。私がジャケットにネクタイという恰好だった（なにしろ場長とメシ食わねばならないので）のも気に食わなかったように、あるトルコおやじは近づいてきて、「ここはネクタイ締めるような奴の来るところじゃねえんだ、さっさと出ていけ」（トルコ語は分からないので、雰囲気解釈）のようなことまで言われた。

トルコ人は親日家が多いし基本的にフレンドリーなので、この部屋での経験はある意味貴重なものだったが、怖くもなかった。ただ、ファンエリアでも他の部分ではそんなこともなかったのだ、あの部屋が選りすぐりの「どろどろトルコ競馬おやじの巣窟」だったという可能性もある。

そのように怖いケースはまれだが、考えてみるとトルコの競馬客には昭和40年代の公営競技ファン（日本の）の雰囲気を感じなくもない。日本でもその頃はまた騒擾事件なども起きていたわけで、そこまでいかずとも賭け事に対してアツくなる雰囲気は残っているような気がする。控除率が50%であるうと、彼らは真剣なのだ。